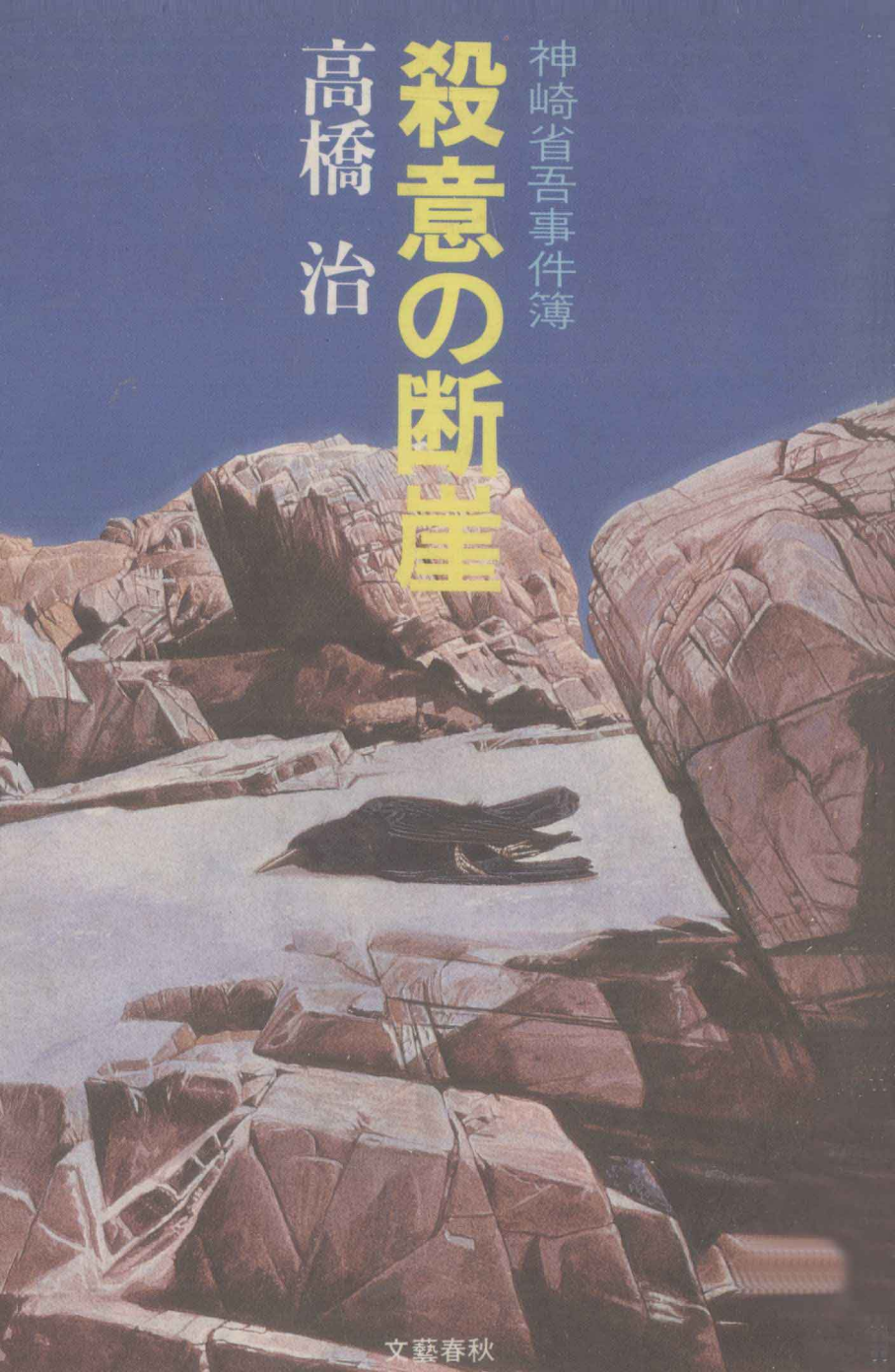
神崎省吾事件簿

殺意の断崖

高橋 治



文藝春秋

神崎省吾事件簿

殺意の断崖

亡 治

文藝春秋

©Osamu Takahashi 1986
Printed in Japan

殺意の断崖

一九八六年一月十五日第一刷

定価 一〇〇〇円

著者 高橋 治

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋
〒102 東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話 (〇三) 二六五―一二一一

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

万一落丁乱丁がありましたらお取替えします

〈目次〉

作り直した顔　5
椿の入墨　33
身内の敵　95
鉄砲ダマ　141
鉄棒の怪　171

装幀　福田隆義

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

殺意の断崖——神崎省吾事件簿

作り直した顔

薄暗い露地で寄りそって唇を合わせている若い男女を見た時、ああ、またかと思った。東京では、赤坂や六本木の夜の表通りで、人眼もはばからずに接吻する若ものがふえたと、週刊誌が書いているのを読んだことがある。自分が買ったものではない。行きつけの床屋で順番を待っている時に、なんの気なしに手にした頁の隅がめくれてしまった週刊誌だった。それでも、神崎省吾は人に見られてはならないところを見つかってしまった人間のように、慌ててその週刊誌を元の場所に戻した。

神崎が住む静岡市では東京の盛り場ほどのことはない。だが、お前さん方人眼というものがあるんだよ、といってきかせたくなるような男女を見ることが最近は少くない。神崎の家は静岡の中心街から大分海の方に下ったところにある。小さな住宅が身を寄せ合うように並んでいる場所なので、夜が更けるとほとんど人通りがなくなる。

それだけに、東京よりは遅れている土地柄でも、別れを惜しむ男女が大胆になれるのだろう。見てしまった神崎の方で鼓動が早くなるような光景に出会うことも珍しくなくなって来ている。

通りすぎてから神崎は考えた。警部補で退職する前の自分だったらどうしただろう。答えは出

なかった。コロシだ、タタキだであけくれた日常では、アベックの狂態などに眼を向ける余裕もなかったのだ。思いはさかのぼった。ほんの短い期間勤めただけで、すぐに私服勤務に引き上げられたが、制服の巡査だった時分ならどうしただろう。近づいて行って、痴漢を刺激するようなことはおやめなさいといっただろうか。

近づくとして、咳ばらいをするだろうか。それとも、男の肩なり女の肩なりを静かに叩くのだろうか。

「うっ」

思わず神崎は唸り声を洩らした。女の肩と考えた時、たった今見て通りすぎた男の首に回された女の袖の模様を思い出したのだ。夜目にも白い生地に、はっきりと見てとれる大小の濃紺の水玉模様が散っていた。今朝、朝食のテーブルで向い合った時に、娘の千鶴子が着ていた服だった。

神崎は立ちどまった。取って返したものか、それとも知らぬ顔をしたものか。神崎には決めかねた。

〝どうする。……どうしたものか〟

自問自答しながら、それでも足は自分の家に向って、いかにも重たげに動き出していた。千鶴子は来年の春には短大を卒業する。そのまま嫁にやったところで、世間が眼をむくとし頃ではない。だが、いつの間にそんなことになってしまったのか。

とんでもない昔の記憶がよみがえった。腰巻で嫁に来た園子がズロースと呼ばれるものを着用しはじめ、いつとも変り目が定かではない中に、パンティなるものをはくようになった。それはまあいいとして、自分の家の庭の洗濯物を茫然とする思いで見たのはいつの頃だったろう。いか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

にも小型だが、物干竿に通されて陽光を浴びていた代物は、模様といい形といい、まさにパンティそのもので、昨日までおむつでふくらんだ尻をふって歩いていたわが娘が、かかるものを身につけるようになったのかと、感慨を新たにしたものだった。

「オマンチを綺麗に洗うのよ」

その頃、一人で風呂に入っている千鶴子に、よく園子は外から声をかけた。

「はーい」

千鶴子は全くかげりのない声で答えた。

「おい、そのお前さんの使っている名詞はなんとかならないのか」

神崎は園子にそういったことがある。

「なんとかって……じゃ、どういったらいいんです」

どうといわれても答えようのあるはずがなかった。

「呼びようがなくて困るから新しい言葉を作ったお母さんがいるって、千鶴子が学校で聞いて来たんです。可愛くっていいじゃないですか。割れ目ちゃんなんて馬鹿げきった言葉は私には使えませんよ。それともなんですか、私にいえっていうんですか、あの例の」

園子はいえというのならいって見せますというように、吸った息をとめて、神崎の顔を見た。

「わかった。わかった」

神崎は慌ててなだめるように両の掌を園子に向けた。

その頃の、小さいなりに立派に一人前の形をした千鶴子のパンティが眼に浮いた時、神崎は猛然と腹が立って来た。

カイヅカイブキの生垣の内側で待っていると、果たして間もなく二人の靴音が聞こえて来て、門の前で止った。
「じゃあね、また、来週の土曜日ね」
千鶴子の弾んだ声がした。
「うん、じゃあね」
男が言葉を返し、こつっと動いた足音がとまった。
「ちー坊」
「なあに」
二つの靴音が近づいた。
「うーん」
媚を含んだような千鶴子の吐息が聞こえた。神崎は右手で門の扉をあけると同時に、左手に提げていたバケツの水をモロに門の外に投げかけた。
「止めろ、泥棒猫みたいなことは」
いい捨てて、振り向きもせずに、烈しい音をたてて玄関をあけると中に入った。

十一月下旬のことで、静岡でも夜は冷える。間もなく家に入って来た千鶴子はぬれネズミになった寒さと怒りとで慄えていた。そんなことには構わず、神崎は考えていた言葉のありったけを千鶴子に浴びせかけた。
「人眼があるということは考えなかったのか。大体、ふしだらだ、お前も。一体どんなつもりで

あんな男とつき合ってるんだ。親の顔も見ない、人間どうしの挨拶もしない中に、人の娘に手を出すなんて男の風上にも置けん。好きなら好きだと俺のところにいって来たらいいだろう。それを春先の猫同然に、みっともない。なにがちー坊だ。猫なで声出しやがって。いってみろ、チンドン屋みたいな服着て、鳥肌が立つような男のどこがいいんだ。俺はあんな男がお前を貰いに来ても、金輪際うんとはいわんからな。それどころか会いもせんからな。そのつもりでいろ」

神崎が怒鳴り散らすのを聞いている中に、千鶴子は逆に冷静になって行ったらしい。

「あら、冗談じゃないわ。お父さんも刑事でしょう、元は。だったら民法が結婚についてどう規定しているかは御存知よね」

「なんだと。そんないいぐさはこの家じゃ許さんぞ」

「親が親らしくして下されば、私は娘らしくします。でも、言葉をかわしたこともない人に水はかける、私のいい分は聞こうともしないじゃ、娘らしくしようがないじゃないですか」

「娘らしいってのはな、羞(はじら)いを含んでいるってことだぞ。男の首ったまにかじりついているところを見られて、それで家に帰って来るなり居直って、なにが娘らしくだ。俺もお母さんも、お前をそんな女に育てた覚えはない。一体、いつからお前はそんなに尻の軽いふてくされた女になったんだ。ありのままにいってみろ。あの男とはどこまで行ってるんだ」

千鶴子の顔に軽蔑の表情が浮いた。

「そんな下劣な品性をしてるとは今日まで考えてもみなかったわ」

「なにッ」

張り倒そうとしたところへ、園子が体ごとぶつけるようにして神崎をとめた。

「事情は私が聞きます。あなたもいいたいだけいったんですから、あとは私にまかせて下さい。千鶴子、早くお風呂に入って着がえなさい」
千鶴子はツンと顎を上げたまま、返事もせずに奥に入って行った。強力犯を扱わせたら、静岡県警で神崎の右に出る者はいない、神崎の神は〝落としの神様〟の神だといわれて来た百戦練磨の男だが、園子にだけはかなわない。商売柄、父親らしいことも、夫らしいこともほとんどしてやれずに神崎は生きて来た。その間、不平もいわずに園子は家を守り続けてくれた。開き直られれば、神崎にとっては頭の上らないことが多すぎる。
その夜寝床に入ってから、神崎は園子に文句をいった。
「俺が警察のOB会で遅くなったから見つけられたんだ。お前はなんにも気がつかなかったのか」
「映画とか学校の時の友だちに会うとか、遅くなる時にはちゃんと理由をいって出かけますからね」
「その理由の裏側にも眼を配るのが母親の役割だろう」
「時代が違いますよ」
園子は神崎ほど心配していないようだった。
「時代が違うからなお気をつけなきゃいけないじゃないか」
「大丈夫ですよ、あの子は。あなたが心配しすぎてるんです」
「お前は見ていないから」
「見てる見てないって、あなた」

園子は神崎のいい終らぬ中にかぶせるように言葉をはさんだ。
「いま時の若い人は、フィーリングが合うというだけでキスぐらいはしますよ」
「それは女の考えで甘いよ。キスだけでとまらなくなるのが男ってもんだ」
「あら、そうですか」
「そうだよ。男らしい男はそこを我慢する。我慢しきれなくなれば、昔はそれなりの方法があったもんだが、今はそれもない。だからなおのこと注意しなきゃいけないんだ」
「ねえ、あなた」
園子の声がちょっと改まった。
「あなたは私と一緒になるまで手も握らなかったわね」
「男の中の男だと自負してたからな」
「するとなんですか。あなたにもあったんですか、それなりの方法が」
神崎は黙った。

翌日は退官者が隠居仕事に頼まれる手軽な用事があった。運転免許の更新者を集めて、新しい免許証を渡す前に行う講習会の講師である。気の張る仕事ではない。適当に冗談を交えながら、交通法規を守った方が運転者にも得になるという話をすれば良い。
一生の警察生活だったが、一課畑だけを歩いた神崎は交通を担当する部門には配属されたことがない。そのために、神崎はあまり好きになれない仕事だったが、受講者には変に評判が良かった。一匹狼でなにごとも杓子定規が嫌い、警察の人間にしては自由な発想に富んだ性格のせいだ

ろう。

「おっかさんが死にそうで病院にかけつける時も、十九キロオーバーにしなさい。罰金も点数も僅か一キロの差で大きく違うんだ。デートに遅れそうで急ぐ時にも、制限速度の一割増し程度にしておいた方が無難です。警察官だって人間なんだから、五十キロのところ五十五キロで走ってても、まあ、大抵は見逃してくれる。それをだな、目鯨たてて捕えるような奴もいないとはいえない。でも安心しなさい、警察の中でだって出世なんか出来ないんだから、そんな奴は。出世しなかった結果が、こうやってみなさんが居眠りしながら聞いてる席へ出て、こんな話をしてる破目になるってわけだ」

こんな調子の話には大抵の受講者が笑う。笑わすことが出来れば、大成功なのだと神崎は考えている。来たくて聞きに来ている人間はただの一人もいない講習会だからである。

その日は、しかし、どうしても神崎はいつもの調子に乗れなかった。頭の片隅には、まだ、千鶴子の問題がくすぶっている。その上、気にかかってならない受講者が一人、講堂を埋めた免許更新者の中に座っていた。

三十六、七になるだろうか。あるいは整った顔立ちのせいで若く見えるが、もう四十歳に手が届いたのだろうか。どちらにせよ、三つ揃いの背広に派手な柄のネクタイが似合いそうな男が、作業衣めいた上下を身につけ、油っ気もない髪をしているのが、妙に眼立つのだ。しかも、細身の体で背が高い。並んでいる受講者の中で、ほとんど頭ひとつ分ほど高く見えた。

その男は、神崎が演壇に立つなり、神崎の顔を見て微笑を送って来た。どこかで見た顔であることは確かなのだが、それが、いつ、どこのことであったかが思い出せない。神崎はいらついた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.